
魔法先生ネギま！～翼を持つ勇者～

天の道を行く妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜翼を持つ勇者〜

【Nコード】

N5230Q

【作者名】

天の道を行く妄想者

【あらすじ】

この小説は仮面ライダーWと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。テンプレ的展開が多々ございますがそれで良いと言う方のみご覧ください。

あらすじ・・・風都を守ってきた三人目の仮面ライダーである小日向貴大、彼はドーパントの策略で別の世界に飛ばされてしまう。果たして彼は風都に帰れるのか！

ブローグ

「待ちやがれ！」

俺の名前は小日向貴大、この町 風都 を守る仮面ライダーだ。今俺はこの街の風を淀ます存在ドーパントを追い詰めたのだが。

「くつくつくこの時を待っていたぞ！仮面ライダー！」

自信満々なドーパントに俺は少し戸惑う。

「どういう意味だ！」

「こういう意味さ！」

ドーパントは右手から白い光を放ちその光は俺を包む。

「な、うお！」

「せいぜい別の世界を楽しみな！」

ドーパントの言葉を聞いた瞬間俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

天「どーも作者の天です！私の第二作目をごらんいただきありがとうございます」

天「今回何故主人公の名前が第一作目と同じなのかと言う疑問を持った方そんな方は近々執筆予定の短編小説『闇を遣う守護者』をごらんいただければ分かります」

天「それでは今回はこの辺で、それでは」

感想などあればいただけると幸いです。

設定

小日向貴大

両親をドーパントに殺されてから鳴海荘吉のお世話になる。風や気配に敏感。

仮面ライダーブレイブに変身する。特殊な体質で最大4本のガイアメモリを使用可能。服装はクリーム色のブレザーにソフト帽を被っている。

決め台詞は「さあ、お前の罪を数えろ!」、「お前の。。。は決まった…… あきらめな!」である。

仮面ライダーブレイブ

小日向貴大が『ブレイブドライバー』を使用し変身した姿。容姿は仮面ライダージョーカーのベルトがブレイブドライバーで頭部の角がユニコーンのように伸びている因みに角を横から見るとBの文字になっている。強化フォームをいれ全部で5つのフォームがある。

ブレイブドライバー

小日向貴大が使う変身ツール。形状はベルトのバックル部分の真ん中と腰の右側にメモリスロットがあるだけのシンプルなものである。変身時は真ん中のメモリスロットにガイアメモリを入れ押し込む事で変身し、マキシマムドライブもガイアメモリを更に押し込む事で発動する。因みに真ん中のスロットがダブルで言うボディサイドのメモリをいれ、腰の右側のスロットがソウルサイドのメモリを入れる。

ハードブレイバー

小日向貴大専用のバイク。

モードチェンジにより飛行が可能でソウルサイドのメモリを使用することによりマキシマムドライブを発動できる。形状はハードボイルダーの後ろに折りたたみ式の翼を取り付けたような形状である

スタッグフォン、スパイダーショック、バットショットは仮面ライダーW本編を参照。

第1話 『麻帆良に降り立つ勇者』 (前書き)

今回は仮面ライダーの登場です。

それではどうぞ。

第1話 『麻帆良に降り立つ勇者』

俺の名前は小日向貴大風都でドーパントを追っていたはずなんだが……気が付くと知らない大樹（なんてもんじゃないなこのデカさは）のそばにいた。

「たくっ……一体どうなってんだ？」

俺が考え込んでいると突然嫌な風が吹いた。俺は風が吹いている方を向って。

（この先に何かあるのか？）

と考えながら俺は突っ走っていた。

刹那Side……

私は今かなりやばい状況にある。まずは鬼どもの攻撃を受けたダメージが大きい事、それと夕風が弾かれて私の手元じゃない事だ。

「讓ちゃんはどう頑張ったがこれまでのようやな」

鬼が腕を振り上げる。

（お嬢様！）

私は覚悟して目を瞑ったがいつまでたっても衝撃がこなかった

「？」

私が目を開けるとそこには青年が立っていた。

貴大Side・・・

俺が風の元をたどって走っていると少女がドーパントではない異形に襲われているところだった。

「らっ！」

俺は迷わずその異形を飛び蹴りで退ける。

「可憐な少女に手を上げるとは許せんな」

「な、何もんやお前！」

「小日向貴大……探偵さ」

「探偵か……ほんなら探偵は探偵らしく犬でも探しとれ！」

俺は異形の攻撃をかわしながら。

「ペット探しは飽きるほどやったっの！」

かわして回し蹴りを喰らわす。そして懷に手を突っ込み　ブレイブ
ドライバー　と　ガイアメモリ　を……。

「あれ、無い？」

ガイアメモリが無かった。体中探して見つけたのは。

「ライトニングとルナってソウルサイドのメモリばっかじゃねーか！」

「さっきの威勢はどうした兄ちゃん？」

俺は異形の攻撃を避けながらスタッグフォンを取り出しギジメモリ（これは全部あった）を挿す。

『Stagg』

スタッグフォンはライブモードに変わる。

「いつて来い！」

俺の声に反応するかのようにスタッグフォンは異形に突撃していった。

「なんやコイツは！」

異形は驚いている、今のうちに……。

「俺の相手してもらっで！」

「おわ！」

別の異形の攻撃をぎりぎりで避ける。まだいたのかよ……。

「もう一発行くぜ」

俺はバットショットにギジメモリを挿すと。

『B a t』

バットショットがライブモードになり他の異形たちに向っていく。

「オマケだ！」

今度はスパイダーショックにギジメモリを挿し。

『S p i d e a r』

スパイダーショックをライブモードにし突撃させる。異形がガジエットの相手をいているうちに……。

「オイ……ここは引くぞ」

と俺は少女の方を掴むが……。

「貴方だけでも逃げてください……」

「何意地はってんだ！」

「……ここで私が引けばお嬢様に危険が降りかかります、だから私は引けません」

「……わかったよ、その代わりこれを預かっていてくれ」

そう言って俺は少女に帽子を預ける。

「これは？」

「兄弟子からもらった大事なもののなんでねあんまり傷つけたくは無
いんだ……それじゃあ行つて来る」

そう言つて俺はガジェットを退けた異形の集団に向つていく。

「今度は兄ちゃんが相手かい」

「ああそつだ！かかつて来いや！」

俺は異形の攻撃を喰らうと洒落にならないのでかわしては殴るかわ
しては殴るを繰り返す。そして暫くたち……。

「兄ちゃん気も魔力も使わんとなかなかやるやんけ」

「ハアハア……そりやどうも」

（とは言つたもののそろそろ限界だな……）

俺は覚悟を決めそうになった時、異形の対角線上の草むらにガイア
メモリらしきものが見えた。

（かけてみるか……）

俺はガイアメモリらしきものに向つて走る。

「なんや気でもふれたんかいな」

異形が何かいつているが気にしないそのまま異形の転がるように避

けてガイアメモリに辿り着く。そこにあっただのは俺のボディサイドのメモリ……ウイングメモリだった。

「はっはっは……どうやら勝利の女神は俺に微笑んだようだぜ!」

俺はウイングメモリを起動させる。

『W i n n b g』

ガイアウエスパーが鳴り……。

「変身!」

そのまま装着していたブレイブドライバーに挿すと。

『W i n n b g』

もう一度ガイアウエスパーが鳴り俺は翼の羽ばたく音と共に仮面ライダーブレイブ ウイング に変身した。

「さあ、お前達の罪を数えろ!」

俺はポーズを決めながら異形どもに向って言う。

「アンタ……何もんや!」

「俺か……俺は仮面ライダーブレイブだ!」

この瞬間、勇気の名を持つ仮面ライダーが麻帆良の土地に降り立った。

第1話 『麻帆良に降り立つ勇者』（後書き）

どーも作者の天です第一話目どうだったでしょうか？今回はガイアメモリの説明です。

ウイングメモリ……翼の記憶を宿したボディサイドのメモリ。格闘戦を主体にしまた翼を出し飛ぶ事も出来る『ライトニングメモリ』と相性がいい。

ライトニングメモリ……稲妻の記憶を宿したソウルサイドのメモリ。使用者を稲妻並の速さにする。

ルナメモリは仮面ライダーW本編を参照。

ご意見やご感想があれば言っただけだと幸いです。それでは

第2話 『戦闘……その後』（前書き）

スランプのため更新が遅れました。

口調や台詞に違和感がある場合は指摘していただければ修正します。

それではどうぞ。

第2話 『戦闘……その後』

「らっ！せい！」

俺は仮面ライダーブレイブ ウィング に変身して異形どもを倒していく。案外たいしたことなく一定のダメージを与えると消えていったのだが……。

「つたく……多過ぎんだろ！」

既に10体は倒したがまだ20体ほど残っている。

「つたく面倒だな！」

俺はルナメモリを取りだし起動させる。

『Luna』

ガイアウエスパーが鳴り俺はそのまま右側のメモリスロットに挿す。

『Luna』

再びガイアウエスパーが鳴り俺の体は伸縮自在になった。

「おら！」

俺は腕を鞭のようにふるい異形どもを倒していき異形は最後の一体になった。

「兄ちゃんなかなかやるやんけ……でも他の奴等と一緒にしてもうたら困るで！」

「そうみたいだ……な！」

俺は異形の攻撃をかわしながらルナメモリを抜きしゃがんで異形に足払いを喰らわす。

「うお！」

異形は転がり……。

「これで決めるぜ！」

俺はウイングメモリを押し込み。

『Wing Maximum Drive』

俺はマキシマムドライブを発動し俺の背中に翼が現れる。俺はそのまま飛び上がり横に三回転して……。

「ウイングストライク！はあ！」

立ち上がった異形に回し飛び蹴りを喰らわす。

「う、うおおおおお！！！」

異形は耐え切れず消滅した。

「ふう……」

変身を解除した途端俺は意識を失った。

・・・

俺が目覚めて最初に映ったのは真っ白な天井だった。

「……………ここはどこだ？」

「気が付いたかい？」

俺が声の方を向くと知らないオッサンが立っていた。

「アンタ誰だ？」

「僕の名前は高畑・T・タカミチだ、よろしく頼むよ小日向貴大君」

「何で俺の名前を？」

「刹那君から聞いた」

「刹那？」

「君と一緒にいた子だよ」

「ああ……………」

「それで貴大君……………」

高畑の雰囲気が変わる。

「キミは一体何者だい？」

「……ただの探偵だが」

「……質問を変えよう、君が持っているものはこれと似ているんだが何か関係があるのかい？」

そう言つて高畑が取り出したのはガイアメモリだった。

「何処でそれを？」

「これは生徒から没収したものだ、やはり関係があるみたいだね」

「……わかった、話してやるよ」

それから俺は高畑にガイアメモリの事とドーパントの事を話した。

「……そんなものが」

「流れてきてるのは確かだろうな」

「……ところで君は何であんなところにいたんだ？」

「知らん、風都でドーパントを追いかけてたんだがそいつに何かされて気が付いたらあのバカデカイ樹の所に居たんだ」

「……とりあえず今の話をある人にして欲しいんだがいいかい？」

「ある人？」

「ああ……この学園の学園長だ」

こうして俺はその学園長とやらに会いに行ったのだが……。扉を開けると頭の長いドーパント？が居た。

「うお！ドーパント！」

「な、なんじゃ！」

「貴大君……残念ながら彼は人間なんだ」

「何が残念なんじゃ！」

「頭じゃねえの？」

「ひ、酷い……」

「まあそんな事はどうでもいい、話が聞きたいって言ったのはアンタか？」

「そんな事って……まあそうじゃが……」

「そんなじゃ手短に話すぜ」

そう言っただけ俺は高畑に言った内容をジジイにも話した。

「なるほどのう……確かに厄介じゃのう」

「それよりあんた等に聞きたい事があるんだが？」

「なんじゃ？」

「あんた等……何者だ？」

「どういう意味じゃ？」

「感じるんだよ……刹那って子の時もそうだったが普通の人間とは違う何かがな」

「……君は魔法と言っのを知ってるかの？」

「学園長！」

「こうなれば仕方なかるう……それでどうじゃ？」

「本やテレビでなら」

「その魔法が実在していると言っならどうじゃ？」

「……あんた等は魔法使いとでも言っ事か？」

「そうじゃ」

「へえ……」

「あまり驚かないんじゃな」

「いちいち驚いていたら風都では生きていけなかったんでな」

「……その風都と言う街だが……存在しない事が分かった」

「はぁ？嘘だろ……オイ……」

「残念だが事実だ」

何故こんな事に……、あつ！

「あいつか……」

「何か心当たりでも？」

「ああ……ここに来る前追っていたドーパントが言ってたんだよ
『違う世界を楽しみな！』ってな」

「それが本当だとしたら君は……」

「ああ……この世界の人間じゃないな」

「……にわかに信じられんのお」

「まあ……そこら辺は信じてもらっしかないな……確かめる方法もないしな……」

「方法ならあるぞい」

「あるのかよ！」

「ふむ……それが魔法で貴大君の記憶を覗く事なんじゃが……」

「それで確かめられるんならやってくれ」

「！、本当にいいのかい？」

高畑が驚いた様子で聞いてくる。

「構わないさ俺は記憶を見られて困るような事はしてないからな」

「……それじゃあ始めるぞい」

数時間後・・・

俺は二人に記憶を見せた。その内容は13歳の時にディスプレイのメモリを持った男に両親を殺され、それからその男に復讐するため
に当時両親がかかわっていたガイアメモリの研究を引き継ぎガイア
メモリとドライバーを設計、後はシュラウドに任せ、そして完成し
兄弟子である左翔太郎が探偵をやっている事務所に転がり込み（理
由は他にもあったが）仮面ライダーになりそこで探偵の仕事を手伝
つていくうちに色々考えるようになるそしてあの男と出会い、最後
は復讐ではなく風都を守る仮面ライダーとして奴を倒したと言うも
のだ。

「……」

高畑とジジイは黙り込んでいた。

「どうした？何か問題でもあったか？」

「いや……無い事は無いんじゃないが……」

「君は……」

「引つかかってんのは親が殺された事か？3年を復讐に費やした事か？それとも……復讐相手を殺した事か？」

「しかしあれは君のせいじゃ……」

「確かにあれはメモリを過剰に使用したものの末路だ、だが止めを刺したのは他ならぬ俺だ」

「それで君はいいのか？」

「ああ……俺は決めたんだ、手を伸ばして届く奴は何があっても助けようとそのためなら俺はためらわない……それが俺の流儀だ」

「……」

高畑が黙り込むそしてジジイが口を開いた。

「君が信用できる人間と言うのは分かった……それで貴大君に依頼したいんじゃないが」

「ガイアメモリか？」

「そうじゃ、最近ガイアメモリが原因の事件が多くてのお、魔法先生たちもお手上げ状態じゃ」

「魔法先生？」

「この学園では魔法使いの先生を魔法先生、魔法使いの生徒を魔法

生徒と言っんじゃないよ」

「成る程な……んで報酬は？」

「この世界に居る間の衣食住と仕事を用意しようと思っんじゃないが……」

「もう一ついいか？」

「なんじゃ？」

「もう一つは俺のメモリを探してくれないか？」

「どういうことじゃ？」

「実は俺は所持しているメモリの3分の2をなくしちゃったんだよ」

「……大丈夫なのかい？」

「俺的には大丈夫じゃないが一般的には問題ない」

「と言うと？」

「俺のは純正メモリって言ってなドライバー専用に使われててな、ドライバーが無いと起動しないんだよ」

「成る程……それならこちらでも貴大君のメモリを搜索するように手配しよう」

「助かる」

「それじゃあ今日はこの辺で……また明日来てもらいたいんじゃないが……」

「分かったまた明日ここに来ればいいんだな」

「そうじゃそれでは高畑君ホテルへの案内頼むぞい」

「分かりました……それじゃあ付いてきてくれるかい？」

「わかった」

こうして俺の長い一日は終わりを告げた。

第2話 『戦闘……その後』（後書き）

どーも作者の天です！

突然ですが貴大の過去（仮面ライダーW本編）をみたいですか？見たいという方は感想で言っただけければ書きます。

ご意見やご感想があれば言っただけければ幸いです。それでは

第3話 『斬劇のCノ子供先生と関西訛りの女の子』(前書き)

す、スランプ街道まっしぐらだぜ……。

それではどうぞ。

第3話 『斬劇のC / 子供先生と関西訛りの女の子』

??? Side・・・

「なんやるこれ？USBメモリ見たいやけど……」

関西訛りの少女はガイアメモリを拾う……それをしている影に気付かずに……。

貴大Side・・・

翌日、俺はジジイに言われた通り再び学園長室に来ていた。

「言われた通り来てやったぜ、んで仕事の話だが……」

「貴大君には4月からあるクラスの副担任をやってもらいたいんじゃない？」

「そんなこと言われても俺は探偵だし……そもそも教員免許だつて持っていないぜ？」

「そこら辺は教育実習生として手続きをするから問題ないわい、それに週2日の非常勤講師にするから探偵業も問題ないじゃろ、それに探偵事務所として使えそうな場所は確保してあるわい」

「大体分かったが副担任になって何をすればいいんだ？」

「ちよつと事情があつてのお……君にはある先生のサポートをして欲しいんじゃない？」

「因みにそいつは……?」

「もちろん魔法関係者じゃ」

「成る程……まあ俺が文句を言える立場ではないしな引き受けよう」

「助かるぞい、それとなるべくガイアメモリの事はあまり公にはしないで欲しいんじゃないが……」

「まあ……努力はするがドーパントが出てきた時は保障できないぜ?」

「それで構わん、それじゃあ担任を呼ぶから少し待ってってくれるのか?」

「ああ、分かった」

それから少し待つとドアから10歳くらいの子供が入ってきた。

「紹介するぞ彼が君の受け持つクラスの担任をしているネギ君じゃ、そしてこっちがネギ君のクラスの副担任になる小日向貴大君じゃ」

「ネギ・スプリングフィールドです貴大さんよろしくお願いします」

「……」

「貴大さん?」

「……ジジイ、ワンモアプリーズ?」

「彼が君の受け持つクラスの担任のネギ君じゃ」

「……ジジイ、ボケてんのか？」

「酷い言い草じゃのう……」

「……これが事情って奴か？」

「そうじゃよ」

「……はあ、まあ引き受けちゃったし文句は言わんが、よろしくなネギ先生」

「はい！よろしく願います！」

このあとネギと色々打ち合わせをした後俺は街の事を覚えるために地図を片手に散策していたのだが……。

「やめてください！」

関西訛りの少女がいかにも不良そうな高校生に絡まれていた。

（あの子はさつきもらったクラスの名簿に載ってたな……確か和泉亜子……だったか）

放っておくのもどうかと思うので助ける事にする。

「オイオイ嫌がってんじゃねーか！」

俺はそう言いながら和泉と不良の間に割ってはいる。

「なんだデメエは！」

「俺はこの子の副担任になる予定の男だ！」

「ふざけやがってやつちまえ！」

男が殴りかかって来るがかわしてスタッグフォンを取り出て操作し……。

「あ、高畑！ちょっと変なのに絡まれたんだけど助けてくれない？」

「こ、コイツあのデスメガネに……」

「やべえ……逃げるぞ！」

男達は慌てながら逃げていった。

「……根性の無い奴等だな」

「あ、あの……高畑先生には？」

「ああ……ほれ！」

俺は和泉にスタッグフォンを投げ渡す。

「あれ？」

和泉はスタッグフォンを受け取り気付いたようだ。

「はなっからかけてないから……っーかあいつの番号知らないし」

「は……ええ!!」

「殴りあっただけがケンカじゃないんでな」

俺はニシシと笑いながら和泉に言う。

「成る程……勉強になりました……でも副担任って言うのは……？」

「ああ……それは本当だ、まあ本業は探偵なんだけどな」

「そうなんですか？」

「ああ……っって言ってもまずは街の事を覚えなけりゃいけないんだけどな」

俺はスタックフォンを受け取り。

「それじゃあ頑張ってください」

「おう！」

俺はそのまま立ち去ろうとするが。

「へへへ……見つけたぜ」

森から男が出てきた。っーか目が逝っちまってるじゃねーか……。

「……メモリを……渡せエ！」

『Armour』

男がメモリを起動し手の甲にある生体コネクタに指すと西洋騎士み
たいなドーパント…… アーマードパント（以降アーマード）
に変化した。

「……お前は離れてろ」

俺はブレイブドライバーとウィングメモリを出しドライバーを装着
し。

『Wing』

メモリを起動し。

「変身！」

ドライバーにメモリを挿す。

『Wing』

ガイアウエスバーが鳴り俺は仮面ライダーブレイブ ウィングへ
と変身した。

「行くぜ！」

俺はアーマードに殴りかかるが……。

「いつで……！」

ものすごく硬かった。

「ちょうどいい！テメエのメモリも貰うぜ！」

そう言ってアーマーDは攻撃してくるが攻撃はたいした事が無いのでかわす、かわす、かわす。

「ちょこまかと！」

「うるセエ！」

俺はアーマーDと距離をとってルナメモリを取りだし。

『Luna』

メモリを起動し腰の右側のメモリスロットに挿す。

『Luna』

「オラ！」

俺は腕を伸ばしアーマーDを掴み持ち上げて落とす。

「ぐっがつ！」

アーマーDはそれなりにダメージを受けたようだ。

「な、舐めるなよ！」

アーマードは瓦礫を投げる……俺ではなく和泉に。

「クソ！」

俺は座り込んでいる和泉の前にギリギリ辿り着いたが防御が間に合わず瓦礫の直撃を受ける。

「ガハッ……」

瓦礫は丁度ドライバーに当たり変身は解除、その衝撃でウィングメモリは外れそのままアーマードの手に収まった。

「しまった！」

「ヒヤハハハハ！次はお前だ！」

アーマードは和泉に向かって歩いて行く。

「させるか！」

俺はスタッグフォンとバットショットを取りだしギジメモリを入れる。

『S t a g g』

『B a t t』

ライブモードになったスタッグフォンとバットショットはアーマードに向かって行く。

「なんだコイツ等！」

アーマードの意識がガジェットに向いているうちに和泉に近寄り。

「今のうちに逃げるぞ！」

「ウチは腰が抜けて動けないんです！だからっ先生だけでも逃げてください！」

（先生か……そんな事いわれたら逃げる訳にはいかねえよな！）

俺は立ち上がると和泉のカバンの横にガイアメモリがあるのに気付く。

「和泉……これは？」

俺はそれを拾い上げ和泉に見せる。

「それは昨日拾ったんです……」

「使わせてもらってもいいか？」

「あ、はい……どうぞ」

俺が振り向くと丁度ガジェットが弾き飛ばされた。

「ヒヤハハハハハ、そいつをよこしな！」

「残念だがそれは出来ないな」

俺はガイアメモリ…… カリバーメモリ を起動する。

『Calibur』

「変身！」

俺はそのままメモリをドライバーに挿し込む。

『Calibur』

ガイアウェスバーが流れ俺は聖剣の記憶を宿した真紅の戦士……仮面ライダーブレイブ カリバー に変身する。

「な、なんだ！」

「お前の敗北は決まった…… あきらめな！」

「ふ、ふざけてんじゃねーぞ！」

アーマードが攻撃してくるがそれをかわし、俺は背中についた刀身まで真つ赤なエンジンブレード…… カリバーブレード を右手に持ち斬る。

「ぐっ……がつ！」

アーマードが火花が飛び散らせながらよろめきウィングメモリを手放す。

「はあっ！」

俺はそれを逃さずウィングメモリをキャッチしてから回転するように一回、二回、三回と連続で斬っていく。

「がっ！ぎっ！……」

そろそろ弱ってきたので……。

「メモリブレイクだ……」

俺はカリバーメモリを押し込み。

『Calibur Maximum Drive』

俺はそのままアーマードに向って。

「カリバースラッシュ！はあっ！」

合計6回の字を描くように斬り裂くと。

「があああああ……！」

アーマードパントが爆散し男と粉々になったメモリだけが残った。俺は変身を解き和泉に近づいて……。

「立てるか？」

と手を差し出す。

「あ、ありがとうございます／＼／」

和泉が俺の手を掴む。

「顔が赤いが大丈夫か？」

「ただ、大丈夫です！」

「？、まあいいか……それより厄介な事になる前にここから離れるぞ」

「え、あ、はい」

俺は和泉を立たせた後その場を去った。俺の麻帆良での戦いはまだ始まったばかりである。

第3話 『斬劇のC／子供先生と関西訛りの女の子』（後書き）

どーも作者の天です。今回はまずメモリの説明を。

アーマーメモリ…… 鎧の記憶 を宿した防御力に特化したメモリ。

カリバーメモリ…… 聖剣の記憶 を宿したメモリ。ボディサイドのメモリで使用時は体が赤くなり刀身まで真つ赤なエンジンブレード…… カリバーブレード が背中に現れるカリバーブレードのスロットはエンジンブレードと違いマキシマムドライブは発動できないがその代わりにカリバーブレードに属性を付加する事が出来る。

本編には後ボディサイドのメモリ一つとソウルサイドのメモリ二つを回収したら入る予定です。（まあ後大体1話ぐらい）

因みに時期は春休み（三巻の前）です。

ご意見やご感想、誤字や表現の間違いなどがあれば言ってください。

最後に一言……俺に元氣かんそうを分けてくれ！それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5230q/>

魔法先生ネギま！～翼を持つ勇者～

2011年10月8日14時50分発行